

山田顕義のヨーロッパ体験と 彼の明治6年「建白書」との関連考

大和大学政治経済学部 准教授
竹本 知行

1 「建白書」の出版

山田顕義は、明治4年、岩倉具視を特命全権大使とする使節団に兵部省理事官として随行し、欧米諸国を視察した。その報告書は帰国後の明治6年、「建白書」というタイトルで出版され、世に知られることとなった。

彼はそこで、当時まさに実行されようとしていた徴兵令の延期を主張する。「兵は凶器なり」とし、「其（その）帝室を守護し人民を安全にするの具、国に法あり、教育の道あり」「（徴兵しても）人民一般の知識敵兵に超越するを以（もつ）て最要とす」と持説を展開したのである。徴兵制を否定したわけではなく、徴兵よりも法律の整備や国民の教育を優先しなければ意味がないとの指摘だった。

2 山田顕義の主張と反響

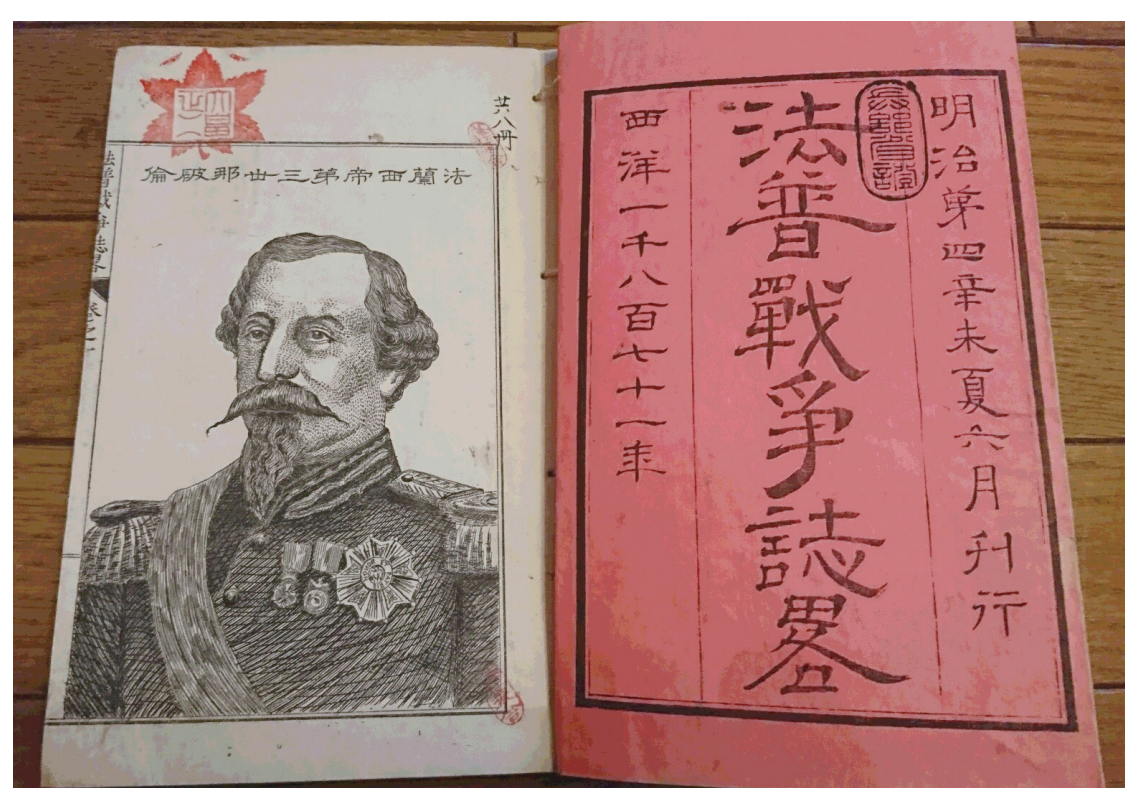
主にフランス、スイスでの視察体験から、強い国になるには何が必要か、国際政治がどう動いているかを考察し、急進的な改革ではなく漸進主義で行くべきとの主張であった。そこに現れた彼の思想は、欧州体験を経た新知識として、また「知恵の塊」と称された彼の名声によって、当時大きな反響を呼んだ。しかし、それを形成した岩倉使節団での見聞、ヨーロッパ滞在中の山田の動静はほとんど不明とされてきた。

3 渡六之助との交流と思想形成

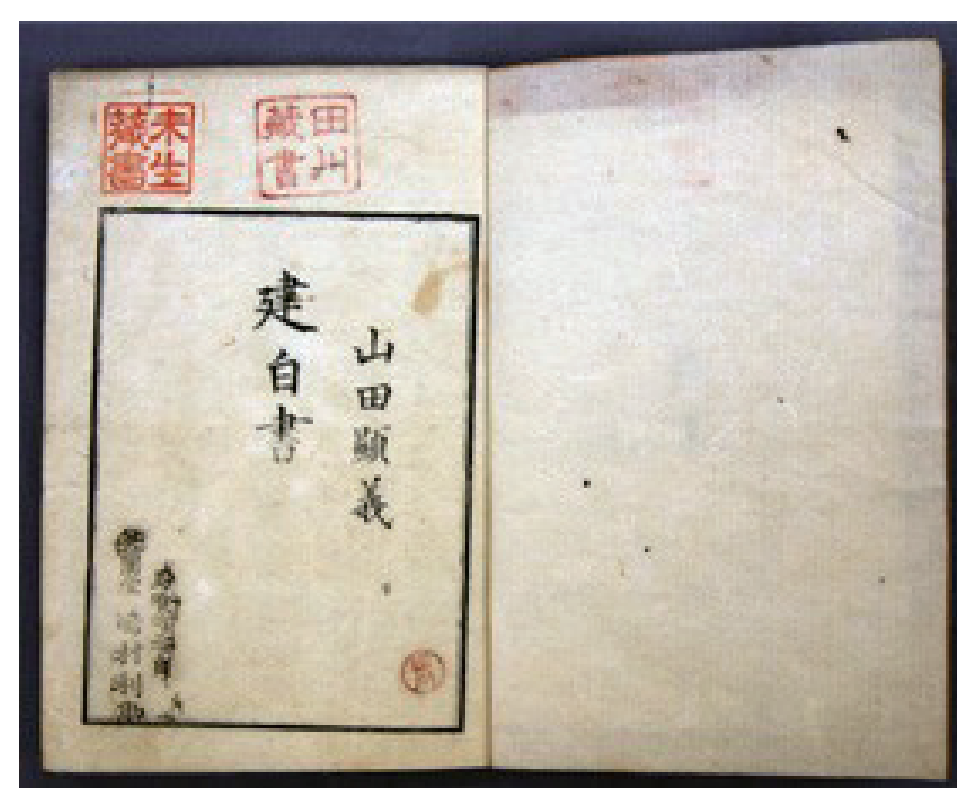
現地ガイドとして山田と行動を共にした留学生渡六之助の滞仏時の日記「漫遊日誌」によれば、山田と渡はともに軍事関連施設への視察やフランス軍人との交流を行った。また、新史料である渡の「上書」には、無原則な急進的欧化政策への批判、国体論を淵元とする「国家と法」・「法と軍隊」の関係性の自覚と強調といった山田の「建白書」と共通した内容が見受けられ、山田の思想形成に渡が果たした役割は大きく、渡との邂逅は山田の後半生に大きな影響を与えるものとなったのである。



明治5年7月16日パリで撮影された兵部省留学生との集合写真。中列向かって一番右が渡六之助、三人目が山田顕義。（筆者蔵）



渡六之助の著作『法普戦争誌略』。渡は普仏戦争にあたってフランス軍のパリ籠城に加わり、詳細な日誌を記録した。それを大山巖に託し、この題で出版されたもの。表紙の見開きにナポレオン三世の肖像が掲載されている。（筆者蔵）



山田顕義「建白書」は明治6年に提出され、大きな反響を呼んだ。山田は、この後軍務を離れ、「建白書」でも主張した法律や教育の近代化に尽力した。（日本大学蔵）

やま だ あき よし

山田 顕義 —初代司法大臣で日大・國學院大の学祖—

萩藩士。藩校明倫館や松下村塾で学ぶ。尊王攘夷運動に参加。戊辰戦争では新政府軍参謀として活躍する。明治4年、岩倉使節団に理事官として加わり欧米諸国を視察し、明治6年6月帰国後は司法大輔などを務めた。西南戦争では薩摩軍を鎮圧、この功により陸軍中將に進む。明治16年に司法卿、明治18年に初代司法大臣となり、法治国家建設のため尽力。日本大学・國學院大学の設立にも携わった。